

## アーティストステートメント

私の扱う陶という素材は、常温の中で触れると、執拗にかたいような気がします。はじめてそう感じたのは、さめきらない窯からだしたとき、火照った表面からぱちぱちと音がしたのです。抱きかかえている最中、自身の手で形成された作品が自立して生きているような感覚におちいりました。

物事を水平に、じっと観察すると、愛着や母性がみえてきました。蓄積された記憶が景色と重なるとき、現実社会から切り離された根源的な生が、自身の手の中で自立して表面化していくのです。

舐嚙の愛とといいますか、自身の作品に対する愛着が、表皮と共に無意識を遷移させる瞬間、常温の中でふれたとき、いかにして生を感じるのか。これらが私の制作での軸になっています。

## 展覧会コンセプト

身体的コンプレックスや幼少期のトラウマが、生活の重りとなり、歩みをゆったりにします。一見自虐的にみえるこの行為は、不可逆性の愛着を沈殿させて、自身の生きるための術になるのです。

共通認識に縛られることなく育つ愛情は、包括されることのない生へのアプローチとなります。嗅覚を上回るほどの視覚・触覚によるフラッシュバックを作品に潜ませて、この度個展に挑みました。

水面下の感情が体をなし、浮遊と沈殿を繰り返すことで記憶が徐々に蒸発していきます。その瞬間の喜びを噛みしめることがわたしの日々の楽しみになりました。